

ラグビー、剣道振興貢献

勇者の挑戦

ぎふ財界人列伝
バローホールディングス編

多治見商工会議所の会頭に就任した2016年、田代正美はあるスポーツの岐阜県協会の会長を引き受けた。「高校の頃から見るのが大好きだった」というラグビーだ。選手の経験こそないが、高校生の全国大会の聖地「花園」はもちろん、世界最高峰の戦いが繰り広げられるワールドカップでは、15年にイングランド大会が開催された英国まで日本代表の応援に飛んだこともある。「ラグビー王国岐阜をつくり上げたい」。思いを胸にスポーツ振興にも情熱を注ぐ。

バローの経営者となつてからは、学生時代から観戦し続ける母校早大ラグビー部のスポンサーになった。ラグビー好きを見込まれ、県ラグビーフットボール協会の会長に就任した田代は、財界人らに協力を呼び掛けた。県ラグビー界の発展、競技普及を支援する県ラグビーフットボール後援会の発足に動いた。後援会の代表理事には、中部薬品の当時の社長が就き、協会の大会運営や選手強化、選手らを物心両面で支援した。都道府県単位の後援会設立は全国的に珍しかった。

田代は17年、ラグビーの名門、ニュ

◇◇11

スポーツ支援



ージーランドの「オールブラックス」の本部も訪問して、地域のクラブチームの在り方を学んだ。「クラブチームから始まり、地域に育てられて強豪になった。日本は学校スポーツではチームを組めないところもある。地域でスポーツを育て支援する時代」。東濃の高校にラグビーチームがなく、「中学生で良い選手は愛知県に持っていってしまう」と多治見のクラブチーム発足にも奔走する。

19年、田代にとっても胸躍るビッグイベントが日本で初めて開かれた。日本代表が初の8強入りを果たし、代表者の表彰する埼玉県の「渋沢栄一賞」を

受賞した。岐阜県内では3人目の栄誉だ。渋沢は明治、大正時代に活躍した実業家で、銀行をはじめ多くの企業の設立・育成に携わりながら社会貢献に尽力した。田代は「渋沢氏が著書『論語と算盤』で唱えた本質を押さえていながら、今後も経営をしっかりとっていきたい」と受賞を喜び、経営はもちろん、財界スポーツ振興をはじめ社会貢献活動の継続へ意を強くした。

ラグビー王国岐阜の実現に向けて、新たな構想を描く。リニア中央新幹線で中津川市に建設される岐阜県駅近く



渋沢栄一賞の表彰状

チャリティーマッチのラグビーボールを手にする県ラグビーフットボール協会長の田代正美（6月4日、可児市大森、嫩葉舎）

田代には65歳から始めた格技がある。剣道だ。週末に地域の子どもたちと稽古に励み、3段の腕前になった。現在、剣道場を建設し、地域に開放する計画を進めている。「日本有数の剣道場にして、稽古も試合も一度はやってみたいと思える施設にする」。2面造り、厚さ45ミリの秋田杉の床の下につぼを九つ埋める。「この仕掛けがあると、うまい人が足を踏み込んだときに床が共鳴するんだ」と楽しそうに話す。

剣道を通じた青少年の育成。道場は今夏、伊藤青少年育成奨学会が可児市で建設に着手し、来春完成する予定だ。73歳の田代は語る。「剣道を生涯スポーツとして、80歳、90歳になっても続けたい。剣道の心技体は経営にもつながる」（敬称略）